

## <最優秀賞> 安藤 泉

### 八月のクリスマス

私が初めて観た韓国映画は『シュリ』でした。新聞に大きく報じられていた広告に興味を持ち、映画館で2度観るほど感動しました。それから、ドラマ『冬のソナタ』をきっかけに韓流ブームが起りました。日本では韓国映画フェスティバルなどが開かれ、たくさんの作品が紹介されました。そうして紹介された韓国映画をたくさん観ました。

その中で、一番心に残った作品が『八月のクリスマス』でした。『シュリ』でも主演されていた名優ハン・ソッキュさんと、すでに引退されていたシム・ウナさんのはかなく、さわやかな恋物語。

『八月のクリスマス』『春の日は過ぎゆく』『ハピネス』の名匠ホ・ジノ監督は日本を代表する巨匠、小津安二郎監督の影響を受けたと聞くだけあり、言葉少なく淡々とした主人公の二人や家族、友達の会話や日常が描かれていて、心に染みしました。

そして、その日常の先に主人公の病気の進行と死がひそかに訪れます。今、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、今までと違う新しい日常（ニューノーマル）を生きなければならない現在を生きる私たちにとって、その静かな日々はもう戻らないのかも知れません。

主人公ジョンウォンはソウルの片隅で小さな写真館を営む病気で余命が短い男性。その写真館に駐車違反の証拠写真の現像を頼みに来る若い女性駐車取締員タリム。たまたま出会って親しくなった二人。銭湯に寄り、ジョンウォンが、タリムがあがるのを待っているかぐや姫の『神田川』のような風景や、映画『ローマの休日』の名場面になぞらえたスクーターの二人乗りのシーンなどが印象的です。

家族の場面では、ジョンウォンの妹家族が韓国の旧盆チュソクで里帰りした時のちゃぶ台を囲んだ夕飯の場面が懐かしい気がしました。料理上手のお父さん、夫の仕事を手伝いながら家事をこなす明るい妹、夫と子供とにぎやかに過ごし、妹が手作りのキムチを残していくのも韓国ならではの日常が伝わるようで好きなシーンです。

ソウルの狭い町で救急車も入らない家で倒れたジョンウォンを救急隊員が背負って病院に運び、死期が迫ったジョンウォンの日々が静かに過ぎていきます。ジョンウォンはタリムへの思いを胸に秘め、残された日々を送り、大切な写真を整理し、最後に笑顔の写真を自ら撮ります。その写真が次の瞬間に遺影になっているところは圧巻の名場面だと思います。

ラストの「君と出会えたことは神さまがくれた最高のプレゼントだと思います。僕にはあの八月に一足早いクリスマスが来たのだ」と静かなジョンウォンの手紙に残された言葉も素敵です。

また、チョ・ソンウさんの静かな音楽やハン・ソッキュさんのさわやかな主題歌も好きです。「クムル クゴ シッポ」という歌詞が好きで、まだ、韓国語勉強中ですが、ここだけリピートしています。

『八月のクリスマス』のような日常がいつか戻れたらと思います。

## ＜優秀賞＞ 的野 紀子

### マルモイ ことばあつめ

私たちにとって、「言葉」とは何だろう。

私たちは、生まれてからある程度生きると言葉を覚え、人と互いに意思の疎通を図るようになる。機能的な面から考えると、「言葉」は、人と人とのコミュニケーションツールと断言できるだろう。しかし、この映画を見て、「言葉」は決して、それだけの意味を持つものではないことを改めて知った。

時は 1940 年代初めの日本統治時代、舞台となるのは、朝鮮の京城（現在のソウル）。朝鮮の人々は、だんだんと朝鮮の言葉を禁じられるようになり、朝鮮の言葉で書かれた刊行物や書籍などの取り締まりが厳しくなっていく。この映画は、そんな厳しい状況に置かれても、朝鮮の言葉を集め、朝鮮の言葉の辞典を作ろうとした人々を描いた物語だ。

この映画が実話を元に作られたものだと知っていたが、これほどの壮絶な物語があったとは…。

「言葉」とは精神。

「言葉」とは生命。

虐げられながら消えゆく「私たちの言葉」。それを、命をかけて守ろうとする人々の熱量に、私の胸は熱く、苦しくなった。

もしも、ある日突然、皆にとっての「私たちの言葉」が奪われたら、人はどうなってしまうのだろうか。「言葉」は、人と人が意思疎通を図るための道具である以前に、人、延いては民族がその土地に暮らしながら、長い時をかけ築いてきた文化や情緒のかたちであり、そこには「精神」が宿っている。そしてそれは、人が生きていく上で核となり、「生命」にも値するだろう。もしも、「私たちの言葉」が奪われてしまったら……。自分が自分でなくなる。生きていても生きてはいない。そういう感覚ではないだろうか。つまり、「言葉」が奪われるということは、「精神」、そして、「生命」が奪われるということと同じなのだ。

概して、いったん植民地支配されると、元来の民族の言葉は喪失し、その後独立を果たしたとしても、元来の言葉は取り戻されることがないと言う。世界の国々を見渡しても、その通りだ。しかし、朝鮮半島では、独立を果たし、朝鮮の言葉を取り戻した。それは、どんなに虐げられようと、何度も何度も「私たちの言葉」を集めようとした人々の思い、そして朝鮮すべての人々の思いがひとつとなり、大きなエネルギーとなり、そうさせたのだと、私はこの映画を通して感じている。

まさに、奇跡の言葉。

生きていてくれて、ありがとう。

私は率直に、こうも思っている。私は韓国語を学び始めてから、韓国語自体はもちろん、その言葉からにじみ出る文化や情緒にも魅了され、まるで何かに突き動かされるように、韓国と韓国語に関わり続けてきた。そして、この映画を通して、さらに韓国と韓国語への思いが強まったような気がする。「奇跡の言葉」へ日々感謝の気持ちを忘れずに、これからも、たくさんの愛をこめて、大切に…。

韓国と韓国語に関わっていきたいと思う。

## <優秀賞> 山崎 水優

### 怪しい彼女

「塞翁が馬」という言葉があるように、自分の人生にどのようなことが起きるのか、誰も予測することはできない。もし年を重ねた人間が急に若い頃の姿に戻ってしまったとき、その時何を考え、人生をどのように歩いていくのか気になり、韓国映画「怪しい彼女」を鑑賞した。また、韓国で制作された映画だが、その後中国や日本などでリメイクされた映画であることも鑑賞のきっかけの一つだ。

この映画は毒舌で気難しく、周囲から疎まれた 70 歳のおばあさんが嫁姑問題にぶつかり家出を決意。そんな中光り輝く写真館を見つけ遺影写真を撮るつもりが、シャッター音とともに心は外見が 20 歳の姿に戻ってしまう内容だ。

最も印象に残ったシーンは、彼女の孫が輸血が必要になり、血縁関係のある彼女が自ら輸血を決意するシーンだ。輸血をすると元の 70 歳の姿に戻ってしまうのだが、それを知りながらも若い姿で人生を謳歌することを諦めたのだ。最初は「孫を助けるためならば、なんでも出来る。してあげたい！」という祖母ならではの気持ちからとった行動かと考えた。しかし、それだけではなくこのまま 20 歳の姿で生きていくことは、70 年の人生を自ら否定してしまうことになるからではないかと感じた。夫に先立たれ、幼いわが子を死なせないよう懸命に働き、我が子を抱きながら泣き叫びながらも、「母」として激動の中を生き抜いてきた人生に誇りをもちたい、人生を認めてあげたい、そんな感情が沸いたからではないのだろうか。そして、同時に私も自分の人生を最後まで認めてあげて、誇れるように一生懸命生きていきたいと強く感じた。

現在、私自身は誇りに思える人生を歩めているのかと考えてみた。私は自分の意思表示を積極的に行わず、考えや感情を心の中に閉じ込めるタイプであった。周りの意見や雰囲気流されたり、自分自身で意思決定を行わなかった故に、あとになって後悔することも多かったため、これからは自分の本当の気持ちと向き合い、行動をしていきたいと感じた。これがきっかけとなり、学生時代に躊躇して挑戦できなかった留学に会社を辞めて行ってみたり、多くの人と出会い視野を広げてみたり、自分の気持ちを最優先で行動をするようになった。そのように行動するようになってからは、今の自分の生活は充実したものであると胸を張って言えるようになった。

この映画を通して今までの自分の人生を顧みる時間を持つことができ、また私の生き方を変えた「人生映画（インセンヨンファ）」となり忘れられない作品となった。軽い気持ちで観ることができるファンタジー要素が多いように見えるが、見進めるうちに嫁姑問題や家族愛についても考えるようになり、老若男女が楽しめる映画だと感じた。そして、自分の人生についてももう一度考えたい人に推薦したい映画だ。次回は両親や同居する祖父母も一緒に観て、感想や各自の人生について共有してみたいと感じた。

## ＜奨励賞＞ 伊東 周平

### 空と風と星の詩人 ～尹東柱（ユン・ドンジュ）の生涯～

「恥を知って生きることは恥ではない、恥を知らない人間こそ恥なのだ」

（『空と風と星の詩人 ～尹東柱（ユン・ドンジュ）の生涯～』劇中より）

本作品は、韓国の国民的詩人・尹東柱（ユン・ドンジュ）の生涯を、全編モノクロ映像で映画化した伝記的作品です。日本植民地（日帝）時代、朝鮮で生まれたドンジュは、詩人になるという夢を抱いていました。しかし時代の波に飲み込まれた 27 歳の若者は、作品を出版できず日本の獄中で死を迎えます。ドンジュの死後、発表された生前の作品の数々はその生き様とともに評価され、国民的詩人として親しまれるようになりました。本作品は、多くを望まずにただ“言葉”で表現することの自由を求めたドンジュと、彼の青春の日々を、独立運動に身を投じた従兄弟・宋夢奎（ソン・モンギョ）との関係を主軸に描いた作品でした。

静かな煌めきで映し出されるドンジュの青春時代、そして訪れる苦悩の日々をモノクロ映像の持つ奥行きで巧みに表現していました。また、随所に散りばめられるドンジュの作品の数々、そして公開当時に若手注目株だったカン・ハヌル氏とパク・ジョンミン氏の繊細な演技が、この激動の時代を彼らは確かに生きていたと感じさせてくれた要因だと思います。

私たち日本人は、たった 70 年ほど前、当時の朝鮮半島へ侵攻し文化や言葉、文字を奪いました。他国の言論の自由を弾圧し、人権すらも踏みにじっていたという揺るぎなき「過去」があります。

「過去」は、「現在」の前にあり、「未来」へと繋がっていきます。そんな当たり前のことを、改めて実感させてくれるものの一つが、映画であり芸術であると思います。映画を通して歴史を学ぶということは、非常に大切に有意義なことです。それが悲しく凄惨な歴史であればなおさらです。

私たちが目を背けてはいけない恥ずべき史実が目の前にあるのであれば、それを知り、学び、心に刻んでいくという姿勢こそ、「未来」を築いていく一員として必要不可欠なのではないかと考えます。

新型コロナウイルスの影響で、日韓関係において重要な旅行など草の根の交流が減ってしまった「今」だからこそ、「過去」や「未来」に思いを馳せながら韓国映画を鑑賞し、文化や歴史を疑似体験することを心よりおすすめしたいです。



## <奨励賞> 三川 紗季

### マラソン

この方はチョ・スンウさんですか。

本当に俳優のチョ・スンウさんですか。

この映画を初めて観たとき、実在の人物が出演しているのではないかと錯覚しそうになりました。ドキュメンタリー映画を観ているかのように、その世界に引き込まれました。内容の深さはもちろんですが、役者たちの演技に感動すること間違いなしの映画です。

この映画は自閉症のペ・ヒョンジンさんの実話がモデルになっています。チョ・スンウさんが演じる主人公のチョウォンは自閉症という障害があり、これは病気ではないので治ることはありません。この障害と向き合う母が疲弊していく…その様子がわかる印象的なシーンから物語が始まります。

後に、チョウォンがマラソンを始めたことによって、状況が変化します。マラソン大会では表彰台に登ることもあり、生き生きとしたチョウォンを見る母は、冒頭とは一転してとても明るい表情になります。

チョウォンの母は息子をフルマラソンに挑戦させようと、かつての有名ランナーにマラソンコーチを依頼します。このマラソンコーチとの出会いや様々な出来事をきっかけに主人公と周りの関係も変化していきます。チョウォンの母は、「息子は私なしでは生きていけない」という思いから息子が自分より1日早く死ぬことが願いと話します。これに対してマラソンコーチからは「あなたは息子なしで生きられない」と指摘されます。息子の手を放してしまった過去、息子の手を掴み直した過去、息子の手を放せなくなった現在、その手を息子チョウォンの方から放そうとするシーンがとても印象的です。マラソンをしたいという明確な意思から、母の手を放して走り出します。

この映画を見て十数年後に、私は知的障害者スポーツに参加することになりました。知的障害者の方と接する中で、この映画の内容が思い出されました。過剰に心配してしまう家族がチョウォンの母と重なり、チョウォンに対して「普通の子」「普通の子じゃない」という言葉が出てきますが、まさにその2つを行き来する状況でした。ただ1つ言えることは、なにかに夢中になる人は強い、それはどんな状況の人でも変わらないということです。マラソンをするチョウォン、私が接した知的障害者スポーツをする方々、そのまなざしは憧れるものがあります。

この映画を観てストーリーに魅力を感じるのもよし、知的障害者理解につなげるのもよし、役者たちの演技に圧倒されるのもよし、初めて観る人も久しぶりに観る人もそれぞれの視点で感じる事ができる映画だと思います。人生をマラソンに例える話がよくありますが、この映画も人生を象徴しているような気がします。

ぜひあなたも主人公チョウォンと一緒に映画のラストまで走ってみませんか。

## ＜奨励賞＞ 本田 千景

### タクシー運転手～約束は海を越えて～

普段は街から街へと「お客さん」を運ぶタクシー運転手。1980年5月、今回は命がけで「希望と真実」を乗せて運ぶ…。

主人公はソウルのタクシー運転手、マンソプ。光州の姿を記録したいというドイツ人記者のピーターを乗せ、「通行禁止」になる前に光州へ向かう。光州に入り目にしたのは、荒れた街並みに「民主主義を死守せよ」などと書かれた横断幕。大規模なデモが行われている場所では、軍人が老若男女構わず市民に銃や棍棒を向け、殴る蹴るの暴行。病院には負傷した学生や市民が数多く運び込まれていた。しかし、検閲や情報規制が厳しく行われていた当時の光州。海外はもちろん、隣の市にすら真実は届いておらず、マンソプもソウルから数時間離れた場所でこんなことが起きているとは知りもしなかった。

無秩序で悲惨な光景が目の前に広がる。そんな光州の姿にマンソプとピーターは呆気にとられ、時に傷心する。そして、彼ら自身も襲撃や暴動に何度も巻き込まれる。そんな中、光州の市民は「この真実を世界に伝えてくれ」と自分たちを犠牲にしてまでピーターを守るのであった。そして、彼らの姿に心動かされたマンソプもまたタクシー運転手としてピーターを必ず空港まで送り届けると約束する。果たして二人は無事に空港へと辿り着き、ピーターはこの事実を世界に伝えることができるのだろうか…。

この映画は、1980年に起こった光州事件を描いた作品であり、実話を元に作られている。社会派映画ではあるが、クスッと笑えるシーンが多く、テンポも良いのでとても観やすい。登場人物の一人一人に大きく魂が揺さぶられるこの作品は、歴史を題材にした映画は難しそうだと躊躇する人にも是非一度観てほしい作品だ。

私はこの映画を観て、自分が生まれる少し前、隣の国ではこんなことが起きていたのかと衝撃を受けた。所々登場する阿鼻叫喚の図は、その場の緊張感、音、匂いを実際に感じるほどの迫力で、目を背けたくもなった。しかしその分、力強く立ち向かう人々の勇気や信念にいたく感動し、身震いした。また、真っすぐな瞳を持ちながらも柔らかく微笑み、どんな状況下でも他人を思いやる人々の暖かさには胸がいっぱいになった。

民主制を守るために、各国で多くの人が戦ったのは紛れもない事実だ。それは日本も例外ではなく、多くの人民が長い時間と労力、そして犠牲を払い自由を獲得してきた。こうした犠牲の上によろやく手にした自由だが、現代社会ではこの自由を有意義に使っている人はきっと少ない。私はこの映画を観終わって、「この自由をもっと大切にしたい。」とそんなことをひたすら考えた。

ただ感動を与えてくれるだけでなく、私たちが持っている権利の尊さに気づかせてくれる『タクシー運転手』。国籍や年齢問わず多くの人に鑑賞してほしい作品だ。

## <奨励賞> 廣江 智恵子

### おばあちゃんの家

夏になると、84歳で鬼籍に入った祖母のことをよく思い出す。子供の頃に毎年、夏休みの数日を祖母の家で過ごしていた為、夏の季節が記憶を呼び起こすのだろう。

母方の祖母は我が家から車で1時間ほどのところに住んでいた。日本の地方都市の例に漏れず、県庁所在地の中心部に居を構える我が家から車で30分も行くと、のどかな日本の原風景が広がる場所に行きつく。町とは名ばかりの、田畑に囲まれた場所に祖母の住む家はあった。同じ市内とは言え子どもの私には、おばあちゃんの家に行くことはかなりの田舎へ行くような気がしていた。

ソウルっ子のサンウだが父親はおらず、母親がソウルで仕事を探す間、聾啞の祖母に預けられる。それまで母親の母であるおばあちゃんに会ったことはなく、口がきけない祖母に悪態をつき、ばかにする孫のサンウ。テレビが映らないといって癩癩を起し、ゲームに夢中でおばあちゃんをことごとく無視する。ピザやフライドチキンが食べたいと我儘を言い、おばあちゃんがせっかく雨の中鶏を絞めて作ってくれた鶏料理を「こんなのフライドチキンじゃない」と泣き出し食べようとしめない。そんなサンウに、見ている私は腹立たしさを感じるが、その一方で、その姿に自分がかつて祖母に対して取った態度を重ね、胸の奥がチクチク痛む。

小学校低学年の頃の私は、夏は暑さで食欲が落ちる上、白米があまり好きではなかった。実家では白米を食べず、おかずだけを食べていた。夏休みに1人で祖母の家に泊まりに行った際、祖母が用意してくれた食事に、「ご飯は嫌いだから、いらない。おかずだけ食べる。」と言ったことがある。その時、祖母は私に「白いご飯が食べられることはありがたいことだから、食べなさい。」と言った。

「昔は麦とか食べて、白いご飯が食べられることは幸せなことだったんだよ。」と。そう言った祖母に私は、「麦ってどんな味？私、麦ご飯って食べたことないから、麦ご飯だったら食べてみたいけど。」と言いつつ。そんな生意気を言う私に祖母はそれ以上何も言わなかったが、その時の祖母の悲しそうな表情は今でも覚えている。そして嫌なことを言ってしまったとばつの悪い思いを抱いた当時の気持ちは大人になった今でも忘れられない。

人はそれぞれ、自身とおばあちゃんとの独自の思い出を持っている。この映画は、おばあちゃんと自分とのエピソードを思い出すトリガーとなっており、おばあちゃんから受けた愛情は個人的なものではなく、形は違えども観る人に共通する経験なのだと教えてくれる。

サンウは迎えに来た母とソウルへ帰るが、別れ際に、字の書けないおばあちゃんがソウルのサンウへ連絡できるよう、気持ちを表現した絵と宛名が書かれた絵ハガキを数枚渡す。

この映画を見る度に、私は祖母を懐かしく思い出し、胸が熱くなるのだ。



## <奨励賞> 武藤 喜世美

### パパロッチェ

ある日、この映画観てと友人から渡された DVD、その題名は「パパロッチェ」。

最初は、イタリアのオペラ歌手、ルチアーノ・パヴァロッチェ、音楽に関連するものとは思わず、ただ、面白い題名としか思いませんでした。しばらく後伸ばしにし、時間が空いた日に DVD のスタートボタンを押しました。

その映画は、私の予想とはかけ離れたもので、ただただ感動のるつぽになりました。

それからは、涙が止まらず、その晩は、感動を受けた場面が入れ替わり立ち替わり、私の頭の中を消えては現れ、消えては現れの繰り返しで、寝ながらも涙していたと思います。

この映画の何が私の心を捉えたのかをお話します。

あらすじは、不遇な生い立ちにもかかわらず、ある先生との出会いにより、声楽家になったという一文で済む簡単明瞭な内容です。ただ主人公はヤクザの世界で生きなければならない境遇に置かれているにも関わらず、そこから抜け出す力、そして才能を認められる機会を与えた先生との相対する葛藤、理解、信頼がこの映画の根本です。

普通ならば、ヤクザに身を置いている生徒を気に留めることもなく、当たり障りなく過ごすであろうこと。才能があるかと思っても確かな確信はもたず、また自分の身を危険に冒してまでその生徒を救おうとはしない。奇跡的な出会いが、奇跡的な偉大な事を成し遂げただけでも涙ものですが、この映画を更に魅了するのは、映画中にちりばめられた、先生と生徒との小さな接点場面がとても印象的なことです。このやりとりが、普通ではせりふで「有難う」と終わってしまうことが、2人の演技から言葉以上の感動を誘います。つまり脚本、演技者、演出が全て最高の選定をされ、最高の協和音となり、素晴らしい作品となっていることです。だからこそ、この話が実話と聞いて更なる感動を呼び起こし、観たものの心を掴んではなさない永遠の名画といえます。

ふとこの映画は、韓国映画だからこそ更に良さが引き出されたのではないかと思います。社会、文化、また師弟関係、人情、友情が絡みあい、韓国だからこそ出来上がった素晴らしい韓国映画ではないかと思います。

最後に、私をもっとも感動した場面を2つ紹介します。

留学に旅経つ主人公を先生が空港で送る場面。二人とも思い思いの気持ちを抱えてはいながら、言葉には出さず、そっけなく終わろうとする中、最後に先生が出国扉を振り返った時、主人公は、一目もはばからずクンジョル（床にひざまずき、最も丁寧なお辞儀）をする姿。

そして、凱旋公演も終わろうとする最後に、主人公が、自分がこうしてこの場に立て歌をうたえるのは、ある先生がいたからだ、その先生に捧げる歌を歌いながら映画のエンドロール。